

## 放送大学での博士号取得

自然科学プログラム

高橋 浩久

学生時代に物理学の博士後期課程を単位取得退学していた私は、博士号取得を一念発起し、理科系の通信制大学院を探していました。しかし、通学制大学院に社会人入学する道は多くありますが、学費という面でやはり厳しいものがあり、通信制はなかなかありません。そんな中で見つけたのが放送大学でした。

放送大学の博士課程で物理学に関する指導を行っていたのは、当時、岸根順一郎先生だけでした。岸根先生の専門分野は物性物理学です。学生時代、私は陽子や中性子を対象としたハドロン物理学という分野で理論研究を行っていました。これらの専門分野では、量子力学や場の量子論といった手法には共通性があるものの、研究対象やその扱いにはかなりの違いがありました。

大学院進学で非常に重要なのは、自分がやりたいことと、教員が指導可能な分野がマッチすることです。博士課程となると専門分野について深く追求していくわけですから、指導教員と自分の研究分野が合致しなければ、十分な指導を受けることはほぼ不可能です。その点、私は、面白ければ専門分野を変更してでも取り組もうという考えでした。これが競争率 10 倍にもなる放送大学博士後期課程合格の要因の一つだったかもしれません。

そうして私は、自然科学プログラムに所属することになりました。放送大学の特徴に、自身の研究分野であるメジャー研究分野プログラムだけでなく、副専攻（マイナー研究分野）として所属と異なるプログラムを選択するというものがあります。私は「人間科学プログラム」を選択しました。また、博士後期課程ではいくつかの講義で単位取得する必要があります。「特論」と呼ばれる授業ではメジャー分野所属の教員陣から自然科学全体を俯瞰するような視点を学び、「研究法」はメジャー分野とマイナー分野の専門分野のトピックスについて学びます。私は元々教育に携わっていたこともあり、マイナー分野では ICT 教育について学びました。

放送大学での博士号取得には、原則として査読付き論文を 2 本出版することが必要です。社会人としての仕事の傍ら、研究に関連する論文を読み、専門書等で知識や手法を新たに習得しつつ研究を遂行するのは、時間的にも体力的にも大変でした。また、一人で研究を進めても見当違いな方向に研究が進んでいく危険性があり、指導教員と議論を頻繁に行うことは非常に重要です。私はおよそ 2 か月に 1 度程度のペースで岸根先生と議論をさせていただきました。さらに、国際会議や研究会などで発表し、他の研究者と議論をさせていただく機会もあり、それらの積み重ねで査読付き論文を 2 本出版という博士予備論文提出要件を満たすことができました。その合格後、本論文審査へと進み、5 年という時間がかかりましたが、博士号取得することができました。

現在、工学院大学学習支援センター講師として基礎教育に従事しております。対面に加えて遠隔での指導を行うことになり、放送大学での学びは現在の職場でも活かされています。

今後も、放送大学での経験を基に、研究・教育活動に邁進していく所存です。